けである。腹の中で笑うような事があっても、その人と共に考えねばいけない。皆さんにお渡しした資料の中には、因縁話にはじまり、病の原因、恋愛、結婚、縁談、商売の方位、家相、墓相、いろいろ書いてある。このような事は自分では好きではないが、その迷った心をこちらに向けるまでの辛抱が大事なのである。

次に応待の仕方であるが、タイミングが大事だと思う。お客がみえても、お茶を入れる間もそこで教化をするという態度が大事である。相手の立場を尊重してやれば、無駄話しのようにみえても有意義で楽しい話にかわると思う。個人教化・信徒教化づくりには、こうした要素が大事なことだと思う。そして未信徒のままの人でも「困ったらいつでもきなはれ」といってやる。

そういう経過をたどり信徒になると、護持会申込書に書いてもらい、檀信徒だけでなく信徒にも先祖供養をさせる。これは信徒をのばしていく方法と考え、私は大事にしている。こうして護持会に入っていくと経本・袈裟・珠数をそろえてもらい、『珠』を施本する。そして「拝みあう」「朝夕のおつとめ」ということを徹底する。これは絶対条件である。各地で班を作り、題目講、それぞれの祈願、声明の練習、体験談などもしている。また、月経も月日はたっていないが、ねらいはお経をあげた後、家族間の話合いを特色としている。そして報告書を出させている。その他、幼児のための「竹の子会」、その幼児たちが大きくなると「若竹会」、青年と親を含めた集まり「自習会」と、家族総ぐるみで信行活動を盛り上げていく。

こうした家族・仲間のふれ合いの中から本物の信仰が生まれてくると、私は確信している。私はよく法華経を引用したあと、「あなたはこの世に何しに生まれてきはった」という。そして、この世の中に人を救うため、大任をもって仏様から命じられて来た大事な人なのだ、といって教化をはじめるのである。

修法と教化

宮川了篤
（立正大学講師）

現在私は、小さな町道場におります。ここにおります

と、信徒の方々は「引越しをしたいのだが、どちらの方向がよろしいでしょうか」「最近、息子の具合が悪いのは何かの障りでしょうか」というような質問をよく耳にいたします。実はこうした身近な、現実の問題に対しての答え方、処し方によって、信徒はより深い信仰に、未信徒は信徒化していくというのが現状であります。つまり日蓮教学あるいは修法論といったものは、大切ではありますが、現実は小さな身に迫った問題の解決から入信するのが大部分であります。こうして生活をしていると、「世間でいう易仏教ではないか、日蓮宗ではないのではないか」と思ったこともございます。そんな時、日蓮宗事典の仕事を通じて、修法師の方々と話す機会を得て、自分なりにある感じを持ち始めました。そこで、これから勉強しようとする人のために編集したのが『日蓮宗祈禱聖典』です。本日は、ここで私なりの日蓮宗の修法について概観させていただきたいと思います。

現在の日蓮宗の修法は、日蓮聖人撰述の『撰法華経』を聖典として出発しております。『撰法華経』が日蓮聖人の自撰であるか否かは、最蓮房の実在性や『三大秘法抄』にまで問題が発展しますので、それは別の機会にして、今は日蓮聖人の祈禱に関するものを見ることにします。

先ず、伊豆に流された時、伊東朝高に、次に文永元年、自分の母を四年延命させている。身延在世富士興師の母が病気になった時、薬王品の二十八文字を書いて与え、焼いて水一合の中に入れ、祈禱して飲ませている。また、厄除は次のごとくです。四条金吾女房の日眼女に三十三歳、三十七歳厄除けを、太田乗明に与えたお手紙には、「この人五十七の厄にして木星の人」というのがあるが、現在五十七といった厄説はなく、七のつく厄説は当時平安・鎌倉期にかけて考えられたことで、日蓮聖人も一般的な習慣にならっていたと考えられます。

さて、日蓮聖人以降の日蓮宗の祈禱は、京都の日像から出発したことは、ご存知のとおりです。日像が、三十番神信仰をもととし、これを祈禱と関連ずけたからこそ全国に普及したと考えられます。というのは、江戸、積善房流伝書の中に、『三十番神遠離相伝書』なるものがあり、明らかに三十番神が祈禱本尊に変ってきていると、私は考えるからです。一方、中山においては、富木日常

の日天子、月天子、それに明星が加わり、三光天子の信仰から始まり、三代日祐の時は、『一期所修善根記録』にもありますように、お経の巻数をたくさんあげること、そのことが祈禱のようです。

また、これは独断的な考えですが、この中山の祈禱は、鬼子母神・十羅刹女信仰をもととして出発していると思われる。これに対し、身延積善房流（日閑）は七面山信仰をもととして出発していると考えられます。さて、中山十代日院は十歳で貫首になり、その永年の貫首職により同寺の発展に努めるが、十一代日典の時、法華経寺修復のため多大な寄進を求め、その功労者に対して、「門外不出」の定めがあるにもかかわらず、功労の多寡により日蓮聖人の真蹟を、ある者には十行、ある者には二行と分け与えている。信徒はこれを「熱がある」といってはなめ、次第に真蹟はよごれ、すりへって見えなくなっていく。このような断簡が時折発見される。すでにお手紙が神聖化されているといえるだろうと思われる。日典は真蹟散出により広島に流罪となる。この事件以降、中山の貫首は京都の頂妙寺・本法寺、堺の妙国寺の三山輪番制となります。これに対し中山四院家は反対をいたします。というのは、四院家の一つ法宣院の弟子が京都で建立したのが頂妙寺でありますから、師匠の中山の者が貫首になるべきところを、弟子の頂妙寺の者が貫首になるということになります。というわけで京都三山輪番制に反対した由です。このような時に遠寿院流・智泉院流という二つの行場ができます。

当時の行僧はどうであったかといいますと、百五十年間に五十八名、つまり二・三年に一名の割です。ところが文化十三年から毎年八名から十二名の修法師が誕生するに及んでいます。日蓮宗の修法が盛んになってきたことを物語っております。それ以後、最も多いのが天保九年頃、一年に二十一名という記録が残っております。多くの修法師を輩出し、盛んになる一方、破門される者なども出始め、その弊害もみられます。その典型的なものが、あの「鼠山感応寺事件」です。これによって智泉院日尚・日啓等は流罪となり、天保十二・十三年は閉門されています。また寄り祈禱等も禁止され、嘉永六年、「みだりに相伝書を譲ってはならない」とし、入行僧も三之

側以上、四段は玄能以上とし、一般の人は入行できなくなった。これにより明治維新までの間、玄能を中心に五十名程が入行し、量より質へと転換していった。

明治になり廃仏毀釈により鬼子母尊神が神仏分離令にふれるということで、中山は一時閉門するが、明治九年より再開されます。この時から今の十一月一日より百ヵ日の制度が確立されます。また木剣で妙音を出す現在の修法も、この頃整備されたもので、それ以前の木剣は打った形跡はありません。また明治二十二・三年頃までは、一回で全ての相伝をさずかっていますが、以降、初行ないし、五行と行数によって分けられるようになりました。相伝書についていうならば、それが形となってみられるのは室町頃であろうと思われます。戦国時代になりますと、自分の要求をもって祈禱する方に依頼しますので、そこで祈り方などが求められ、真言・山伏・天台等より日蓮宗に合うべき経文を当て、次第に整ってきたようです。

また優陀那院日輝も筒封じの祈禱を行ない、その時の筒封じが金沢立像寺と忍者寺の妙立寺に残っています。祈禱論では『加持病患祈禱肝文鈔』（充洽園全集第二編）等を記しています。この中で、この経は何々の病気、この祈禱は何々をお経にしないとして、徹底した祈禱観を持っています。明治になると、宗学者から軽んじられた修法師の中からも、斉藤巍黎が出て『法華験家訓蒙』を著わし、比企ヶ谷妙本寺、後の日蓮宗管長藤原日迦に認められている。

修法は常に社会の要求に応じて祈禱してきたわけです。さて現代、日蓮宗の新寺建立をみますと、その九五％以上がこうした庶民の中にあって、その悩みを聞き、庶民の生活の問題を解決している修法の方法によるものと断言できます。日蓮聖人に祈禱の淵源を求めれば、「易仏教だ、おがみやだ」と軽んずることは決してできるものではありません。今、修法はますます隆盛を極めておりますが、同時にその質も問いつつ、日蓮宗修法布教を考えていく時だと思っております。

追記　宮崎英修所長の特別報告「日蓮聖人における一般性」は、「日蓮聖人の仏法の特色」（本誌に掲載）と趣旨が同じですので、「日蓮聖人の仏法の特色」を参照されたい。